

点画の種類とその学び方



小学校で学習する漢字の書体は楷書です。楷書は一点一画が分離されていて、それらを組み立てると字形になります。当たり前のことですが、漢字（楷書）に使用される点画はほぼ決められたものが使用されます。したがって、点画の種類を正しく認識していないと、正しく整った字形が出現しにくくなります。そのため、点画の名称を知り、その正しい書き方を習得することが必要になります。しかし、残念ながら点画の知名度は低いようです。

ここで、いかに点画名が意識されていないかを、大学の授業におけるQ&Aで紹介しましょう。

Q「太」では「一」「丨」「ㄣ」の画が使用されます。さて、「一」「丨」「ㄣ」はそれぞれなんという名前でしょうか。

山梨大学教授 宮澤 正明
みやざわ まさあき

A（そんなの知ってるよ、といった表情で）「横画」「左払い」「右払い」です。

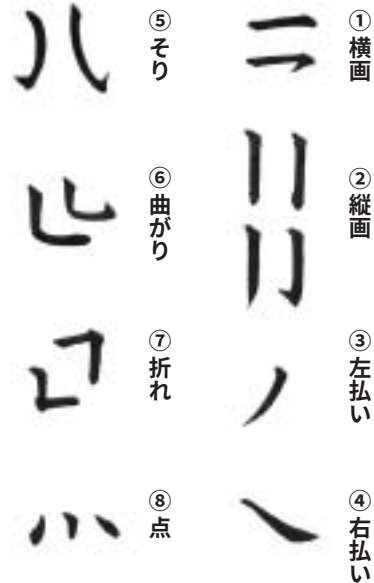
Q そうですね。では「ㄣ」はどうでしょうか。筆順にしたがって点画名を答えてください。

A（表情が急変し、横や前にいる学生とひそひそ話が始まります。）一画目は「点」二画目は「横画」三画目は「えー、何、何？」四画目は「点」だよ。五画目は「えー？ わかんないよ。」

毎年繰り広げられる光景です。横画、縦画、左払い、右払いはなんとか答えられるようですが、そのほかの点画名になると、もう記憶されていないかのようです。

ここで、点画の種類と名前を確認しておきましょう。小学校国語科書写で挙げられる点画は、次に示すものです。

点画の種類と名称



①横画（ヨコカク・オウカク）最も頻度の高い画です。「うかんむり」の三画目のように終筆をはねるものもあります。

②縦画（タテカク・ジュウカク）終筆の違い（止め、はね、払い）によって三種類に分けることができます。

〈止め〉「止め」には、しっかり押さえて止めるもの（古来「鉄柱」とよぶ）と、横画などと接する場合のように、強く押さえなくて軽く止めるもの（この用法による縦画を古来「垂露」とよぶ）があります。毛筆で学習する際はこの両者を区別して指導したいものです。

〈はね〉次の画に移行するためにはねる場合（水・小など）と、字体のなごりとして書かれるはねなどがあります（丁・利など）。

〈払い〉縦画の終筆は、本来止めかにはねなのですが、最終画に縦画が書かれる場合、払いの筆使いで書くことがあります。次字への移行を円滑にするために古来、払うことが習慣化しているのです。したがって誤りとはされません。光村図書三年の書写教科書では、「十」が教材化されていますが、この習慣に基づき、縦画の終筆を払いにして示しています。

③左払い（ヒダリハラヒ）終筆を左下方向にスーと払う画です。左払いにはその方向・長さの異なるいくつかの種類があり、これを適当に扱うと字形が整いにくくなります。また、これらの左払いはどのような場合に使われるかがほぼ決まっていますので、その種類とともにここで紹介しましょう。

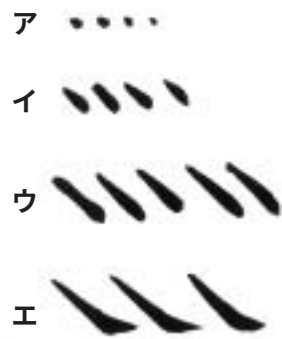
左払いの図



17年度版「書写」三年 14ページ右下

〈千〉 左払いの下に横画がくる場合、その横画とほぼ平行になるように払います。他の字例として「和・番」の一画目などがあります。

〈本〉 左払いの反対側に「右払い」がある場合や、左払いの途中で縦画がある場合で、ほぼ四十五度方向に送筆して払います。他の字例として「人・会・仁（にんべん）」などがあります。



ア 始筆 筆先を軽くそつと紙に置いてみる。これを何度か繰り返す。

イ 始筆と送筆その1 アでそつと置いた筆先を少し押さへながら短く右下に引いて止める（点を書く要領）。

ウ 始筆と送筆その2 右下に引く長さを次第に長くする。

エ 始筆と送筆と終筆 ウまでができるようになったら、筆圧を最大にして止めた筆を一気に右横へ抜いて（払って）みる。

この方法を大学生に試したところ、「今までになく右払いがスムーズに書けるようになった。」「筆圧の入れ方が理解できるようになった。」という意見が多く出ました。筆圧を加減しながら書く右払いは、毛筆の弾力性に慣れていない児童にとっては至難の技でしょうから、初めから右払いを書かせるのではなく、筆圧の加減を感じさせ

〈天〉 左払いの途中で横画が交わったり、筆が横断したりする場合に用いられる左払いです。交わったり横断したりする部分まで垂直に送筆し、それを過ぎてから左下方向に向かいます。他の字例として「大・夫・火」などがあります。

〈用〉 左払いの反対側に縦画がある場合です。縦画と呼応するように垂直部を長くし、終筆の部分だけ左下に向かって払います。他の字例として「川・月・角」などがあります。

④ **右払い（ミギハラヒ）** 小学生にとって毛筆で学習する際になかなかうまく書けないのがこの画です。軽く入る始筆、徐々に筆の圧力を加えてゆく送筆、止めてから筆の圧力を急減させながら右方向へ払う終筆といった一連の動きが難しいようです。①②③の画に次いで多く使用されるだけに、その筆使いと形はしっかり身につけたいものです。

右払いの学習方法の工夫

筆圧の加減が多いので、始筆、送筆、終筆を次の要領で分散して学習すると効果的です。

ることで理解を深めていく方法が近道のようなです。

⑤ **そり** 冒頭のO&Aのように、「そり」と⑥「曲がり」

⑦「折れ」の区別がつかない大学生がほとんどです。「そり」は大きな円の弧の一部です。右回転、左回転の二種類があり、終筆は必ず「はね」を伴います。

⑥ **曲がり（マガリ）** 縦から横に方向を変えるとき、止まらずに円運動をして方向転換するのが「曲がり」です。終筆は止めとはねがあります。

⑦ **折れ（オレ）** この画は、これまでの①～⑥（④を除く）までの画の複合画と考えればわかりやすいでしょう。先行する画の終筆がそのまま次の画の始筆になるととらえることができれば、「折れ」の筆使いは理解しやすくなります。

⑧ **点（テン）** 児童の書く「点」を見てみると、筆を単に押さえつけたり、紙に軽くトンと当てたりするだけといった書き方を見かけます。「点」は短いながらも送筆部を必ず伴いますから、数字という点とは異なり、短い画であると考えようにしたいものです。

点画の種類・名称を理解することは、漢字を正しく書くことはもちろん、字形の認識力にもつながるものです。漢字の学習指導でも点画の名称を用いるなどして、書写で学習したことを他の学習でも生かして、書写の日常化を図りたいものです。